

和歌山県立博物館評価(令和2年度事業評価用)

博物館長による評価	<p>一昨年末からのコロナウイルスの蔓延は入館者数の減少を招いたが、一程度に踏みとどまっている。全国的に展覧会の延期・中止があいつぐ中で、当館では一部影響があったが、ほぼ計画どおり開催することができた。適切な危機管理のもと博物館活動をどう継続させるか真剣に考えなければならない。春の特別展「戦乱のなかの熊野」はウイルス感染第一波の影響を大きく受けたが、戦国ブームもあり注目され、秋の特別展「国宝粉河寺縁起と粉河寺の歴史」は国宝粉河寺縁起全巻の展示ということから広く興味を喚起した。また夏休み企画展「稲むらの火 濱口悟陵」は時宜を得た企画であった。学芸員は各自の専門とその周辺分野をカバーしているが、より専門性を高めるためには、近現代など不足している分野の人員を補う必要があり、さらにいえば学芸庶務のポストも是非必要である。文化財防災、あるいはレプリカ製作による盗難防止・社会教育の試みは、地域住民との共働という文化財保護法の理念を先取りするものとして他府県の模範となっており、さらに継続されたい。災害時の文化財緊急避難の必要を考えると、収蔵庫の効率的活用を再考する時期に来ている。展覧会のPRのために、メディアをさらに利用する方策を検討することが望まれる。</p>
評価部会による評価	<p>コロナ禍の中にあっても、文化的事業の必要性を認識して、その活動を絶やさないように、ほぼ年間を通じて開館したことは一定程度評価できる。ただ、このような条件・環境を逆に活用する戦略があったか、新たな手法を開拓したかという点では課題が残った。「コロナ後」に向けて、質的な改善の準備を進める必要があり、あわせて常設展のリニューアルという課題もあるが、そのためにも不足する学芸員専門分野(考古・近現代・教育普及など)の拡充が求められよう。収蔵庫の収蔵容量の拡大や、多様な形による情報発信、科学研究費補助金の活用などについても、重要な課題として取り組んでいただきたい。</p>

令和2年度 和歌山県立博物館評価様式

1. 資料収集・管理

博物館長による所見	県内資料の収集という方針のもと購入・寄託とも適切に行われているようであるが、有効活用の見込まれないものを選別するなど、収蔵庫に一定の残存率を確保しておくことが望ましい。博物館建物の建築経年を考えると、カビ被害を特に注意する必要がある。収蔵品のコンディションチェックは常時行われている。当館での展示や他館への貸し出しなど、資料の活用は積極的に行われている。
評価部会による所見	資料の収集・保管については、適正に行われているが、画像データを含め、収蔵品データベースをより整備し、ネット上などでの公開が求められる。なお、その前提として、当館が貴重な文化財の収蔵を行っていることを、広く県民に知ってもらうことが必要である。収蔵庫の容量拡充については、年次計画を策定して検討する必要がある。資料購入予算の枠を超える資料の購入については、あらかじめその手法を検討しておいた方がよいと思われる。

①資料収集

(1)適正な資料・図書の収集とその数量の把握

令和2年度目標	収集区分ごとに受け入れ、ただちに情報の整理・データ入力作業を行う。
自己評価	館蔵品は、購入・受贈の際に資料カードを作成するとともに、データ入力を行っている。寄託資料は、受託時に専用のデータベースに入力し、預かり証書を発行している。図書資料は、受入時にデータを入力した上で配架している。
課題・改善案	現在フィルムとデジタルデータの形式で保管している、館蔵品と寄託品の画像データの蓄積・整理を行う必要がある。

②資料保存

(2)資料の保存環境管理、点検調査、資料の修復

令和2年度目標	棚・棚板増設のために必要な経費の算出を行う。総合的虫菌害管理における、調査項目の見直しを行う。
自己評価	収蔵庫の容量増加のために必要な費用を、各収蔵庫ごとに積算した(約41,000千円)。総合的虫菌害管理における調査項目については、見直しを検討中。
課題・改善案	収蔵庫棚の増設について、中長期的な計画を策定する。収蔵庫内の定期的な清掃・整理についての、作業指針を設けて実行する。

③資料管理

(3)資料の管理方法、全体の数量の把握

令和2年度目標	収蔵資料全体の件数・点数を、年度末に集計する。寄託品データベースに準じて、館蔵品データベースの整備を行う。
自己評価	館蔵品計1,142件24,490点、寄託品計2,594件16,131点(令和2年度末)。寄託品データベースに統合するための館蔵品データの整理状況は、約80%。
課題・改善案	ネット上での公開を念頭において、すでに基礎データのある館蔵品データベースと寄託品データベースを統合するための方式を調査・検討する。

④資料の活用

(4)他機関への貸出、資料の情報公開

令和2年度目標	他機関への貸出基準を策定し、ホームページなどで公開する。貸出用デジタルデータの整理を行う。
自己評価	貸出基準はおおむねまとまっているが、明文化されていない。貸出の多いデジタルデータは、ハードディスクのフォルダの中に収納されているが、統一されたインデックスを作成する必要がある。
課題・改善案	貸出基準を内規として明文化し、ホームページ上で公開する。貸出用デジタルデータの整理をさらに進める。

2. 調査・研究

博物館長による所見	各学芸員の調査・研究は顕著な成果を上げている。科学研究費補助金による調査研究がようやく緒につき、また他機関との共同研究は従来から積極的に行われている。それらの成果は、学術雑誌や学会発表などでの発表が想定されるが、あわせて当館の展示に反映させるよう努めるのが望ましい。将来予想される災害や頻発する盗難被害に備えた文化財の調査研究が継続的に行われているのは、他県の博物館の手本となっており、高く評価できる。
評価部会による所見	特別展・企画展の内容を見れば、継続した調査・研究の成果が十分に示されているものと思われる。科学研究費補助金などの外部資金を活用して、さらなる研究の広がりや他機関との共同研究が実行できるかが、今後の課題となる。研究成果の発表の場である当館研究紀要のレベルアップのために、外部審査や他者評価システムの導入も検討する必要がある。

①調査研究活動

(5)適正な調査研究、調査研究データの整理、共同研究の実績

令和2年度目標	調査研究データ(テキスト・画像)の整理手法を確立して、徹底させる。他機関との共同研究にも積極的に参加する。
自己評価	調査研究データの整理方法は、まだ確立されていない。他機関との共同研究は3件(「災害の記憶」に関する資料調査・小川八幡神社経調査・和歌山市内文化財調査)。
課題・改善案	調査研究データを集積するルールを定めて、既存データの整理を行う。他機関との共同研究は、引き続き同程度で実施する。

②研究成果の活用

(6)展示・教育普及活動等への反映、学術的公表

令和2年度目標	展覧会や研究紀要、講演会など館内の媒体のほか、外部の媒体を通じて研究成果を公表する。
自己評価	展覧会・研究紀要・講演会などでの研究成果の公表は、従前通り実施した。講師として派遣され、研究成果を公表した講演会は、計7回。
課題・改善案	引き続き、館の事業と関連して研究成果の公表につとめるとともに、外部での公表の機会を利用する。

3. 展示

博物館長による所見	コロナウイルス流行の影響を大きく受けたが、特別展・企画展は県民の要望をよく反映している。さらに、アンケートなどを利用して斬新な企画を考えてほしい。レプリカやパネルなど展示補助品は、定期的な修繕、更新が必要であろう。予算措置をした上で、状況に合わせて、企画展における小図録の発行の検討が求められる。
評価部会による所見	特別展・企画展は、関係地域のバランスなども考慮しながら、一定の役割を果たしていると考えられる。常設展は、開設後25年以上経過しており、最新の研究が反映されておらず、また老朽化が目立つようになっているため、改修・改善が必要である。そのための構想づくりの作業を始めることが望まれる。来館者端末をはじめ、新たな展示技術・解説手法に対しては、継続的に注意・関心を払うべきであろう。さらに、近現代をテーマとした展示、若年層向けの展示などにも積極的に取り組んでほしい。

①常設展

(7)展示の更新、計画的な保守・管理

令和2年度目標	レプリカ・模型・パネル類や展示機材など、劣化した資料などの修繕にかかる費用を算出する。現行の音声ガイドシステムから、来館者端末を利用したシステムへの移行の手順・必要な要素について検討する。
自己評価	過去に常設展改修のための見積を入手したことはあるが、現状に即した見積は取っていない。音声ガイドについては、常設展部分のシステム移行の環境(備品・システム)は整っている。
課題・改善案	模型・パネル・複製などの種類ごとに、修繕にかかる見積を取る。同時に、研究の進展に伴う解説の修正について、該当箇所の検出が必要である。音声ガイドについては、企画展示室を含むWi-Fi環境の整備を行う。

② 特別展・企画展

(8)コンセプト・構成・展示手法、成果物、来館者・展示資料の安全

令和2年度目標	資料の残存状況・調査活動の進捗・県民の要望等をふまえ、中期・長期の展示計画を立案しておく。今年度の展覧会の開催にあたっては、新型コロナウイルス流行の状況をみながら、来館者の安全が確保できる形で実施する。
自己評価	令和5年度までの大まかな構想は、検討している。令和3年度については、当初の計画通り実施する方向で、各展覧会を準備している。
課題・改善案	上半期までに令和5年度までの計画を策定し、博物館協議会などに諮る。

③ 館内小展示・出前展示

(9)実績とコンセプト

令和2年度目標	時宜にかなう展示として、資料の保全に留意しながら、館内小展示を行う。
自己評価	2階文化財情報コーナーでスポット展示として、「疫病平癒の霊験仏」・「博物館のたからもの」・「粉河鋳物師の獅子」・「新春を祝う」の4本を開催した。
課題・改善案	引き続き、テーマや時期を検討して、随時開催する。

(10)アンケートの分析

令和2年度目標	アンケート回答率の増加(10~15%)をめざす。アンケートの内容とその後の対応経過の公開について、手法等を検討する。
自己評価	年間を通じた回収率は10.9%。アンケート内容のデータ整理は行っているが、公開には至っていない。
課題・改善案	さらにアンケート回収率の向上につとめる。アンケートの集計情報を、ホームページで公開する。

4. 教育普及

博物館長による所見	この分野はコロナウイルス感染の危険度を配慮しつつ実施することが求められるという困難さがつきまとう。学校・団体の博物館利用は継続的に受け入れたいところであるが、感染の危険を避けることが優先される。体験学習・ワークショップ・講演なども困難が伴うが、感染が長期にわたれば、オンラインなどの別の方法を検討することが必要であろう。3Dレプリカのさわられる展示にも同じ問題があり検討課題である。ボランティア活動、友の会活動は、比較的順調のように思われる。
評価部会による所見	感染予防に十分に留意し、またオンラインなどを活用すれば、講演会や講座、ワークショップなど、もう少し活動が実施可能であったのではないかと。とくにこの分野におけるネット技術の活用は、今後標準的なものになると思われるので、十分に準備しておく必要がある。県民からの文化財コンサルティングは、県民の関心を示す情報として、概要・分野などを集約しておくことが望ましい。

①学校・団体の利用

(11)学校・団体の利用実績と広報活動

令和2年度目標	前年度を上回ることを目標とするが、参加者の安全に留意しながら、可能な範囲で対応する。
自己評価	学校団体の利用実績は、36校1,609人。新型コロナウイルス感染症流行の影響もあり、校数は前年度比85.7%であったが、利用者数は123.8%と増加した。学校行事の県外での活動を県内に変更したことが、影響しているものと思われる。
課題・改善案	引き続き、前年度を上回る実績をめざす。

②講演会・博物館講座

(12)講演会・博物館講座の実績、参加者へのアンケート調査

令和2年度目標	講演会・博物館講座は、参加者の安全に留意しながら、可能な範囲で実施する。
自己評価	新型コロナウイルス感染症流行予防のため、予定の中止・変更を余儀なくされた。秋季特別展については、当館学芸員による講演会(予約制)を1回実施した。
課題・改善案	予約制による人数制限をかけながら、可能な範囲で実施する。

③展示解説・ワークショップ・見学会・関連行事等

(13)実績の把握、参加者へのアンケート調査

令和2年度目標	新型コロナウイルス流行の状況下でも開催可能なイベントについて、十分に検討した上で、実施をはかる。
自己評価	展示解説(ミュージアムトーク)・ワークショップは、新型コロナウイルス感染症流行予防のため、実施できなかった。現地学習会(文化庁補助金事業、広川町・湯浅町)は、入館制限の事前告知をした上で実施した。
課題・改善案	展示解説の代替措置(ネット上での動画配信など)について、検討する。

④県民との協業

(14)ボランティア・友の会などの活動実績、観光事業との連携

令和2年度目標	和歌山大学ミュージアムボランティアのほかに、博物館にとっても有益になるような、一般ボランティアの導入について検討を行う。
自己評価	和歌山大学ミュージアムボランティアは、新型コロナウイルス感染症流行のため、活動時期が大幅に制約されたが、6名の学生が延べ10回参加し、「さわれるレプリカ」着彩、寄託資料調査、音声ガイドナレーションに従事した。
課題・改善案	和歌山大学ミュージアムボランティアについては、参加者の安全に留意しながら、従前と同じメニューで実施する予定。一般のボランティアについては、博物館友の会を母体とするような募集を検討する。

⑤人材育成

(15)学芸員実習・インターンシップ・教員研修などの受入実績

令和2年度目標	参加者の安全に留意することを条件に、希望校・希望者を受け入れる。
自己評価	学芸員実習(1回・3名)及び教員研修(2回・23名)は、例年通り実施した。インターンシップは、新型コロナウイルス感染症流行の影響で中止する学校が多く、例年より実施校・参加者ともに減少した(3校4名)。「けんぱく・こどもゼミ」(7回)は9名が受講・修了。
課題・改善案	参加者の安全に留意しながら、従前と同程度の規模で受け入れる。

⑥文化財に関する相談への対応

(16)問い合わせ・質問(電話・来館等)への対応実績

令和2年度目標	問い合わせ・質問への対応件数、さらにその内容についても把握する記録方法について検討する。
自己評価	対応件数は485件。それぞれの内容を把握する記録方法は確立されていない。
課題・改善案	問い合わせ内容を、簡便に記録する方法を検討する。

5. 広報・情報発信

博物館長による所見	ポスター、チラシは県内外の必要な施設に送付されているが、交通要所など人流の拠点へ重点的に送ることが必要。自宅に留まることの多い昨今であるから、HPの利用は増加すると思われるので、定期的な更新と一層の内容充実を行う。広報・情報発信のための予算が必要である。
評価部会による所見	アンケート調査などによれば、当館ホームページは一定程度役割を果たしていると思われるが、見やすさ・使い勝手、情報量のバランスなどからみて全面的に改善する必要がある(外国語表示を含む)。リアルタイムに近い情報発信や、展覧会情報を求める利用者への情報発信(ニュースレターなど)の手法を改善・検討することも求められる。広報印刷物は、重点的な配布と各種団体との連携が必要であろう。通りがかりの利用者を増やすため、その誘導策として最寄りのバス停(県庁前)に「近代美術館・県庁前」と併記するなど、博物館周辺における広報を展開する必要がある。

①メディアへの情報発信

(17)取材への対応・掲載の実績

令和2年度目標	メディアに対して、情報提供のルールの範囲内で、より積極的な情報提供につとめる。
自己評価	報道機関への資料提供回数は12回。
課題・改善案	異なる角度による同一件名の複数提供など、報道機関への資料提供を積極的に行う。

②ホームページの運営

(18)アクセス件数・更新回数、コンテンツ・デザイン等の工夫

令和2年度目標	年間閲覧回数80,000カウント。ホームページのデザイン更新について、方向性・必要経費について具体的に検討する。
自己評価	年間閲覧回数は約68,000カウント。デザインの更新は実施できなかった。
課題・改善案	携帯端末でも快適に利用できるように、画面のデザイン変更を検討する。

③印刷物の制作

(19)ポスター・チラシ・館だより・カレンダー等の制作実績

令和2年度目標	制作枚数の見直しのほか、基本的な配布先に加え、より効果的な配布先・配布枚数等を随時検討する。
自己評価	特別展ごとに、とくに協力関係にあった機関(粉河寺・日本美術刀剣保存協会和歌山県支部など)を通じて、重点的なちらしの配布などを行った。
課題・改善案	ポスター・ちらしの数量に過不足がみられるので、引き続き印刷枚数・配布枚数の検討を行う必要がある。

④さまざまな広報手段

(20)多様な広報手段の検討

令和2年度目標	既存の広報手段にとらわれない、新たな広報の手法を開拓する。
自己評価	エントランスのガラス面に創立50周年を示す大判のシールを貼ったり、公用車に特別展のマグネットシールを貼るなどしたが、画期的な手法とまではいかなかった。
課題・改善案	令和3年度に開催する大規模展では、新たな広報手段を交えて広報を展開する。

6. 組織と運営

博物館長による所見	総務課と学芸課が一体となり運営されていること、および各学芸員の自主性が重んじられるところは、他の自治体施設の模範となるところで、大いに評価できる。防災マニュアルにより、避難誘導訓練が行われたが、各職員の体験的訓練が望ましい。展覧会実施についてはウイルス感染を防ぎつつ入館者数の増加が計られているが、アフターコロナを見据えた展望も必要である。
評価部会による所見	コロナ禍による入館者数の減少はやむを得ないところであり、入館者数そのものではなく、諸々の対策全体を評価の対象とすべきである。博物館協議会・評価部会は、いずれも書面により行われ、その特性によって有意義な意見が多く寄せられたようであるが、コロナ禍によって確立したオンライン会議の方式は、平時においても有用と考えられるので、その運営の仕方について検討してほしい。そのほか、さまざまな災害・リスクに対して、入館者・資料の安全を確保することを想定しておくことが求められる。初めて行った産休代理学芸員への代替については、円滑に行われたどうかを検証する必要がある。

①組織・人員、職員研修

(21)適切な人員配置についての検討、各種研修への参加実績

令和2年度目標	当館の機能を維持するために必要な研修へ、職員を参加させる。
自己評価	県の防災要員としての研修に1名参加した。
課題・改善案	文化財に関わる国実施の研修に、学芸員を参加させるほか、館内業務の共有・継承のため、館内での研修も行う。

②利用者数

(22)利用者数の把握・分析

令和2年度目標	入館者35,000人。当面の中期的目標は50,000人とする。新型コロナウイルス流行の影響は非常に大きいですが、前年度より増加することを最低限の目標とする。
自己評価	入館者数は19,033人(前年度比53.6%)。年度を通じて、新型コロナウイルス感染症流行の影響を大きく受けた。
課題・改善案	新型コロナウイルス感染症流行収束後のためにも、魅力のある展覧会を継続することによって、来館者の当館への関心を維持させることが必要である。

③情報公開

(23)使命、目標、計画、評価などの公開

令和2年度目標	策定され次第、当館ホームページ上で公開する。評価様式を簡略化する一方、より具体的な目標設定とその対応を重視した形式への転換をめざす。
自己評価	令和元年度評価をホームページ上で公開。評価の方式を、より具体的な課題とその改善をチェックする形式に移行した。
課題・改善案	課題の設定とその改善というサイクルを、早期に確立する。

④危機管理

(24)危機管理・防災体制に館するマニュアル作成、実地訓練等の実施実績

令和2年度目標	新型コロナウイルス流行に対応するマニュアルを整備し、実行に移す。
自己評価	県の定める指針に従い、4月下旬に感染拡大防止のためのマニュアルを策定し、その後継続した。
課題・改善案	さまざまな危機(火災・地震・不審者侵入など)に対するマニュアルを整備し、訓練を実施して、事態に備える。

7. 施設・設備

博物館長による所見	対人および対列品を目的にした免震設備を総合的に考える時期に来ている。建物が築20年以上を経過しているため、カビの発生防止は早めに対策を講じておくのがよい。
評価部会による所見	設備・施設の改修は容易にはできないが、優先順位を付けて着実に実施できるよう、中長期計画を策定しておく必要がある。入口・エントランスホールにおける導入・ガイダンス・ホスピタリティ(もてなし)の表示・機能が弱く、入館者へ冷淡・不親切な印象を与えている印象があるため、何らかの工夫を検討されたい。

①施設設備の維持管理

(25)日常的な点検・改修保全の実施実績、安全衛生の管理、中長期修繕計画

令和2年度目標	次に必要な大規模修繕に関する構想・計画を整理する。
自己評価	建物外壁の修繕、館内エレベーター3基更新についての、費用算出を行った。
課題・改善案	緊急性の高い箇所から、予算化して実施に移す。定期的な改修が必要な箇所の計画をたてる。

②アメニティーの向上

(26)バリアフリー・ユニバーサルデザイン等への対応

令和2年度目標	館内表示・展示解説等に、英語だけでなく中国語・韓国語の表示を加えるための検討を行う。
自己評価	ホームページの利用案内の部分について、日本語以外、英・中・韓の3か国語バージョンを提供した。
課題・改善案	館内の表示に、多言語表示を行うことが必要である。

8. 財源

博物館長による所見	現予算を下回らないよう努力が必要である。現在助成を受けている文化庁補助金のほかに、国の科研費や民間の助成金を有効に活用する。
評価部会による所見	県の重要な施設として、予算縮減の影響を被らないよう、各方面へ主張することも必要であろう。文化庁補助金を長期間獲得している点は、その実績を含め評価できる。科学研究費補助金をはじめ、民間のさまざまな助成金の獲得についても、獲得できるよう努力することが望まれる。入館料・図録販売について、利用者の便を図り、歳入を得やすくするために、さまざまな形式のカード・電子マネーなどに対応できるようにすることも課題であろう。

①予算の確保

(27)財源の確保、歳入実績

令和2年度目標	通常事業に必要な財源の維持のほか、入館料をはじめ、歳入を上げるための努力を行う。また、来年度の大規模展実施のための枠外予算の獲得につとめる。
自己評価	大規模展は、前回とほぼ同程度の予算を獲得した(24,073千円)。
課題・改善案	受付・ミュージアムショップでの支払いを容易にするため、クレジットカード決済を可能にするための準備を行う。

②外部助成金等

(28)外部助成金等の獲得実績

令和2年度目標	文化庁補助金を利用した事業を、引き続き実施する。科学研究費補助金の獲得をめざす。
自己評価	文化庁「博物館を中核とした文化クラスター形成事業」を実施した(3事業、事業費4,469千円)。科学研究費補助金事業に1件申請した(基盤研究(C)(一般))。
課題・改善案	引き続き、外部助成金等の獲得につとめる。